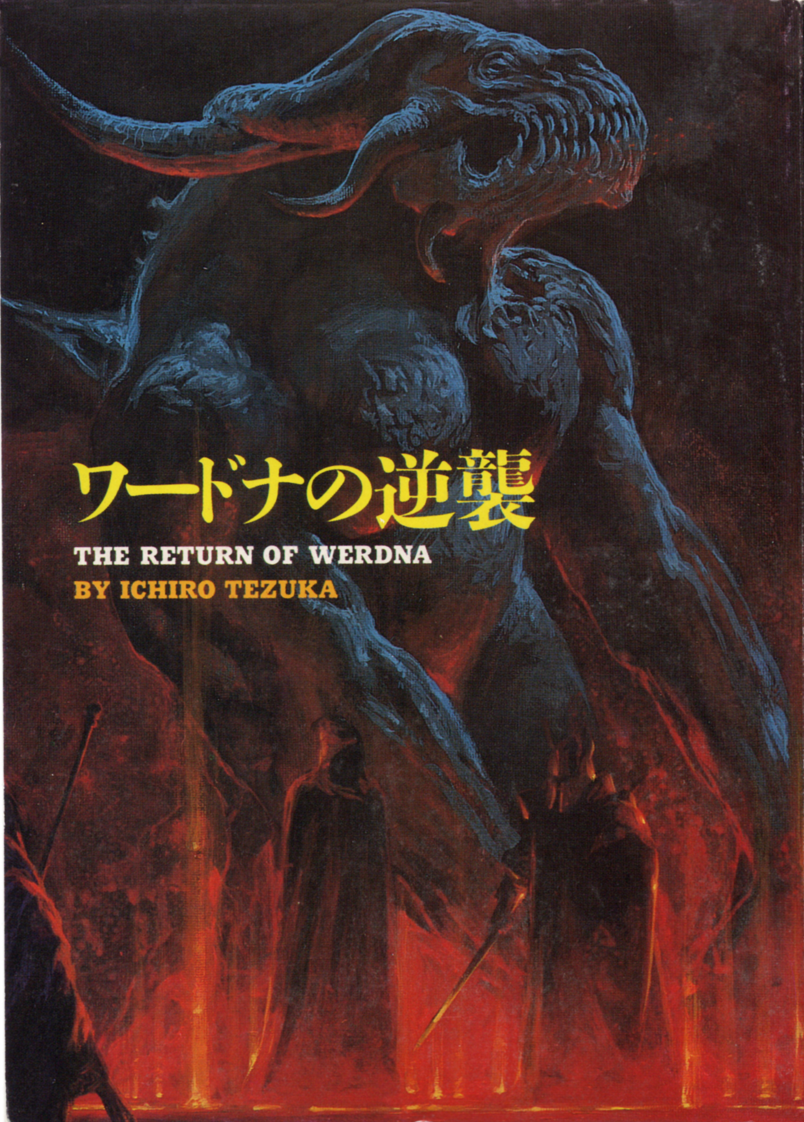


ワードナの逆襲

THE RETURN OF WERDNA

BY ICHIRO TEZUKA

ワードナの逆襲

THE RETURN OF WERDNA

ワードナの逆襲

手塚一郎

THE RETURN OF WERDNA

WIZARDRY・SCENARIO #4

THE RETURN OF WERDNA

by ICHIRO TEZUKA

序章

1

《墓守りどもを呼び醒ませ！》

《守りを固めろ！》

《罠を忘れるな！》

《——》

《……》

遠くで、声が聞こえた。
そういった記憶があった。
そして、闇が動き始めたのだ。

2

玄室。

そういう言葉がある。

古墳などの内部に造られた、棺を納めるための部屋のことである。

太古、権力者たちは、己れの力を誇示するがために、丘状の大きな墓を建てさせたという。中に入るのは、当然、これを造らせた者である。

何故、死してもなお生前の力を、そして己れの存在を、後世へと伝えたいのか。この疑問に答えられるのは、それと同じだけの権力を握っている者以外には存在しないであろう。常人では想像もつかない、《選ばれし者》だけの持つ思考が産んだ狂気の具現なのだ。

しかし、ここは不思議なことに、そういった権力を誇示するための、その一切を排除していた。眠れる者を讃えるための装飾も、死を憐れみ捧げられる供物さえも見ることはできなかった。あるのは、ただひとつ。《罠》と称される、何も知らぬ者に危害を、いや時には死さえも与えようとして考案され、仕掛けられた存在だけなのであった。

この《罠》は、侵入者——多くの場合、墓を暴き、盗みを働く愚か者だ——から玄室を護るために設置される。ところが、見る者が見れば、ここに仕掛けられた数々の《罠》の脅威が、

墓荒しにではなく、何か別のものに対して向けられているのではないか、ということに気づくに違いない。まるで――。

そう、それは、ここへの侵入よりも、ここからの脱出を恐れているかのようなのだ。だから、死んだはずの者が何らかの邪悪な力によって復活し、玄室から脱出を企てようとするのを防ごうとしているのではないか、というあまりに莫迦げたことを考えてしまうのも無理のない話だった。

そもそも、この巨大な墓は、一体いつの時代に、誰のために建てられたのであろうか。しかも墓は、水と緑に育まれた豊かな地に造られたのではなかった。剣と魔法とが支配する、人の住むべき殺伐とした地上よりも、さらに黄泉の国に近い場所――神に見放された、悪魔の版図――地下深くに建造されていたのだ。

多くの者が、この墓を《ピラミッド》と呼んでいたのは、切り出した石を積み上げた、四角錘の形をした建造物であったからに他ならない。しかし、何故これが《ピラミッド》でなければならなかったのかが説明できるのは、高位魔道を究めた者の中でも、極少数に過ぎなかったと思われる。

《ピラミッド》は、底面の正方形と、その各辺に隣接した四つの三角形の、合計五つの面によって構成されている。この中でも重要とされるのは、後者の三角形である。

魔法を表す記号や象徴は、幾つも存在する。

例えば、円。

世界に光と熱をもたらす太陽はもちろんのこと、生命の誕生を予感させる卵の形、己れの尾を噛む蛇、といったものが代表する《永遠》は、この《円》という記号によって表されるわけである。では、これがどのように魔法に使われたのだろうか。

魔法の中には《模倣呪術》なる分野がある。これは、ある物を対象に似せることによって、それと同等の存在まで高めるための呪法だ。

手元にある人形を、憎むべき相手に似せていくことで、そこに精霊を宿らせることができる。あとは、この人形を攻撃すれば、同等の傷を相手に与えられるであろう。臆する心を鼓舞するために毛皮を被り、熊や狼になりきるも、もちろん可能だ。

これの応用として、薬や道具がなくても、病人や死者の胸に《円》を描くことで回復および蘇生などの奇跡が起きるという。

これが《三角形》となると、その意味合いも当然変わってくる。《三角形》とは、三位一体の象徴。世界の両極である空と地に加え、そこを往復する水が存在する。身体と精神をつなぐのは魂。未来と過去は現在によって橋渡しされる。――このように挙げていくと、世界を形成する多くの要素が〝三〟という数字で表せることに気づく。いや、《三角形》こそが世界を象徴するのだとしても、まったくのでたらめとは言えないだろう。

《ピラミッド》を造り、その中心に玄室を置いたのは、《ピラミッド》こそが《世界》であり、

眠れる死者を、その世界の主だとすることで満足させ、外への興味を失わせるためだったのかもしれない。

しかし、運悪く死者が強欲で、そんな小さな世界では満足できないとしたら、どうなるのか。それは、考えるだけで背筋が寒くなる。

3

地中深くに造られた巨大な墓——。

その中心にある玄室は、かび臭くはあるが、ナイトウォーカーが想像していたような腐臭は漂っていなかった。

音を立てずにすべてを終えてしまおうと思っていた彼だが、そのお世辞(せじ)にも広いとは言い難い玄室を見回して、思わず、ちっと舌打ちしてしまった。

ここ——地下世界を少しでも知っている者ならば、〝ブロック〟という単位を使う。縦横に伸びる通路は、それを形成する壁の厚さも考慮すると、そのすべてが寸分の狂いもなく十メートルの幅を守っていた。つまり、十メートル四方の正方形を一ブロックと数えることで、たやすく位置の確認および指定ができるというわけなのだ。

この玄室に、そういった単位を用いるなら、東西、南北が二ブロックずつの、計四ブロック

分の広さ、と言えばいいだろう。

盗賊を生業とする、〝ナイトウォーカー〟という名の男は、今、自分は見間違いをしたのだと言わんばかりに、もう一度、今度は先ほどよりも少しゆっくり視線を巡らせた。

石の塊を積み上げて造ったこの玄室は、一条の光の侵入すら許さず、ただ沈黙に支配されていた。玄室の《主》が発する瘴気か、神秘の力に呼び寄せられた微かな大気の流れに揺らめく砂煙のためか、ナイトウォーカーの掲げる松明の光は、多くを照らしはしなかった。

ごつごつとした石壁が、柔らかな松明の光に触れ、複雑な陰影を浮かび上がらせる。それ以外は、白くもあり、また黒くもあるという不気味な闇のみが、彼の見ることのできる唯一の光景だった。

ナイトウォーカーは、また舌打ちをした。こんなはずではなかったのに……。愚かな夢を見ていた自分に気づいてしまったことへの悲しさよりも、思い通りにならなかったことへの怒りの方が強かった。奥歯を、ぎりぎりと噛み、ただでさえ鋭い眼は、彼が愛用している短剣の刃のように細くなった。

こんなことが、あってたまるか。ちくしょう、あいつらに何て言い訳をすりゃあいいんだよ。

激しい自責の念が、ナイトウォーカーをさいなむ。自分を止める仲間を臆病者と罵り、ここまでひとりで来てしまったことが恥ずかしくなった。財宝なんてものは存在しなかったのだ。

つい数時間前のことである。

この城塞都市へと辿り着いたナイトウォーカーと、五人の仲間たちは、《ピラミッド》がある地下迷宮の巡回、という仕事を持ちかけられたのだった。

地下迷宮へと入ってゆき、第十層を巡回、戻ってきたら、その様子を報告すれば仕事は終わり。何とも簡単なものである。職もなく放浪の旅を続けていた彼らにしてみれば、ふたつ返事で引き受けているところだが、すぐにそうしなかったのは、報酬が百ゴールドという法外な金額であったからだ。もちろん、安いのではない。はっきり言えば高すぎるのである。よそ者に対して、たったこれっぽっちの仕事をしただけでこんな報酬を出すとは、何か裏がある。そう感じるのは当然のことだ。かなり、やばい仕事のような気がした。ナイトウォーカーたちは、いくら金に困っているとはいえ、ひとつしかない生命を落とすような真似はしたくなかった。だが、魅力的な誘いには違いない。

問い詰めた結果、仕事を持ちかけてきたドワーフは、自分は〝迷宮管理職〟に就いている者のひとりだ、ということを白状した。

迷宮の地下十層に《ピラミッド》があり、その中心の玄室には、百年前にこの地を騒がせた悪の大魔道師の亡骸が封印されている。最近、街では、この魔道師が復讐のために蘇るのではないか、という噂が誠しやかに囁かれ、恐れおののいた人々は巡回の仕事を避けるようになってしまった。王国の騎士や戦士は数が少ないため、迷宮の要所に詰めさせるだけで手いっぱいである。そのため、こうやって民間人——当然、それなりの経験を積んだ者でなければならな

いが——に協力を要請しているのだ、とドワーフは言う。

百年にも渡る平和のために、この都市に居を構える、危険を承知で依頼をこなす〝冒険者〟の数は減少の一途を辿っている。故に、この仕事を頼める相手も稀——そういう理由からよそ者に仕事が回ってきたのだそうだ。

ワードナ。

それが、悪の大魔道師の名である。彼は、その昔、この地の王・トレボーが持っていた〝魔法の魔除け〟を盗み出した。その魔除けに秘められた強大な魔力を解放し、世界を手中に収めんと企んでいたのだ。トレボーの命により動き出した追手から逃れるために、彼が、城塞都市のすぐ近くに、一夜で十層にも及ぶ広大な地下迷宮を造り上げられたのも〝魔法の魔除け〟の些細な力に過ぎないというから恐ろしい。

ワードナは、その地下迷宮で誰にも邪魔されず、魔除けに秘められた、さらに強大な魔力を解放する研究を続けるつもりだったのであろう。しかし、各地より集まってきた〝冒険者〟と称される、善行をなす者たちの活躍により、大いなる野望は、ついに実現することのない夢として終わったのだった。

いや、果してその野望は、本当に潰えたのであろうか。疑問であった。ワードナの遺体を一度でも見たことのある者ならば、必ずそう感じるに違いない。魔法に生み出された炎で灼かれ、鋭い剣で切り刻まれていたにも関わらず、その貌は安らかな寝顔のようであったのだ。それが、

いつになるのかは誰にも判らなかったが、やがて邪悪で神秘的な治癒の力より身体は再生され、再び眼を開く時が来ると思えて仕方がなかった。
冒険者たちによって断たれたのは、仮初めの生命に過ぎなかったのであろうか。
誰の胸にも不安があった。
如何なる魔法の力によるものなのか、ワードナの亡骸を完全に始末することができないと知ったトレボー王は、それを、彼の造り上げた広大な地下迷宮に封印してしまうことにした。もちろん、魔除けの力で迷宮に改造を施し、罠を張ることも忘れなかった。こうして、以前の面影を微塵も残さない迷宮と、その最下層のピラミッドが生まれたのだった。

4

迷宮管理職にあるというドワーフの話を聴きながら、ナイトウォーカーに頭に、ひとつの考えが浮かんだ。だが、それを打ち明けたのは、仕事を受け、仲間同士だけで地下迷宮へと足を踏み入れてからだった。
彼の生業である《盗賊》という職業からすれば、考えてもおかしくないことだったが、それに反対する者も仲間たちの中にはいた。
――ワードナの封印されている玄室には、きっと金や銀などの財宝が隠されているはずだ。

この機会に、そいつをいただいちまおう。
最初に、この突拍子もない考えに反対したのは、六人パーティ中の三人。つまり、ちょうど半数だ。彼らが反対したのには、ふたつの理由がある。
まず、彼らの戒律による問題だ。人間に限らず、理性と知能を持った生き物ならば、自分が生きていく上での指針とも呼ぶべきものがある。生きていれば、様々な状況に直面することは避けられず、さらに、それに対する自分の行動を決定しなければならないだろう。その、己れの価値判断こそが〝戒律〟なのである。
自分の意志を殺してまでも法に忠実に生きることを《善》と言い、反対に法よりも自分の心の赴くままに行動するのを《悪》。そして、その中間は《中立》とされた。
玄室に置かれているであろう財宝を奪うことに反対したのは、当然のことながら《善》の三人だ。盗みを悪いことだと思っているのだ。
戒律とは、己れの生き方。だから、よほどのことがない限り、それについての口出しなどできようはずもない。だが、ナイトウォーカーの癇に障ったのは、そんなことではなかった。彼が腹を立てたのは、ふたつ目の理由なのである。こともあろうか、彼らは、その行動自体が危険だ、と言ってしまったのだ。
ああ、何とも情けない理由ではないか！
信頼の置ける仲間だと思い、行動を共にしてきた連中が、あのドワーフのくそったれの言っ

た作り話――子供でも怖がらないような陳腐な怪談さ――を信じているとは。しかも、残りのふたりも、彼らに同意を示している。こちらは、ナイトウォーカーと同じく中立のはずであるのに……。

ナイトウォーカーの顔は、怒りのあまり真っ赤に膨らみ、眼球は飛び出しそうだった。裏切られた気分だ。自分が間違ったことを言っているなんて思ってもいない。間違っている者がいるとしたら、それは奴ら以外に考えられなかった。だからこそ、一緒に各地を旅し、生き延びてきた仲間に対して〝臆病者〟と罵ることができたのだ。

行くも行かないも、お前らの自由だ。だがな、後で後悔するなよ。頭を下げたって、金貨の一枚もくれてやるものか！　と言うと、ナイトウォーカーは、地下十層を巡回するパーティを離れ、ひとり玄室の中へ入り込んだ。

そういうことだったのである。

5

ナイトウォーカーは、失意の念を隠しきれないまま、心細い松明の灯りに頼って玄室内の探索に取り掛かった。

如何に人々に恐れ、憎まれていたワードナとはいえ、これほど大規模な墓に葬られている人

物だ。どんなに少なくとも、財宝と呼べる、いや金に替えられる物品はあるはずだ。何でもいい。帰る家もなく、放浪の暮らしを強いられ、その日の食い物にも困る生活は、もう嫌だった。この玄室で何か——彼には、それが具体的に何であるのか想像もつかないが——を捜し当て、これからの人生を楽して暮らしたかった。いつも人の目を気にして生きるのは嫌だ。もう危険な目には遭いたくなかった。

金に飢えている——彼の心をひと言で表現するならば、これが一番適切であろう。

どろりとした粘っこい闇が、ナイトウォーカーの掲げる光源に溶かされ、隠していたものを晒(さら)け出してゆく。だが、やや赤味を帯びて浮かび上がるのは、彼が想像していた通りの、そして一番そうであってほしくないものに過ぎなかった。

石の壁と床——そう、何もなかったのだ。

ちっ、と舌打ちをした。もう何度目になるのだろうか。ふと、ナイトウォーカーが、そんなことを考えた時、視界の隅に何かが見えた。有り余るほどの闇ではなかった。もちろん、冷たい石でできた壁や床でもない。一体、それは何なのか。

ナイトウォーカーは、音を立てないように気をつけながら、ゆっくりと近づく。音を立てることで、財宝という名の〝夢〟が醒(さ)めてしまうのではないか、と恐れるかの如く。

耳の奥で、心臓が早くなってゆく。喉が、からからに乾いていた。神経が研(と)ぎ澄(す)まされ、靴底を通して、踏みつける砂の一粒ひと粒さえ数えられそうだった。

ナイトウォーカーが見つけたのは、石で造られた箱だった。部屋の隅に、ぽつんと置かれたそれは、何の違和感もなく存在している。まるで部屋の一部であるかのように。だから、今まで気づかなかったのかもしれない。

彼は、この箱のすぐ手前に来るまでは、その正体が判らなかった。たっぷり十秒眺めてから、これが《棺（ひつぎ）》だということを悟（さと）った。そうだ、ここは《玄室》なのだ。

思考が鈍っていたのを恥ずかしいと、彼は思っていた。もしかすると、知らず知らずの内に、自分も、あのドワーフの莫迦（ばか）げた話——悪の大魔道師の復活を信じていたのかもしれない。

ナイトウォーカーは、あまりのおかしさに笑おうとした。口元には確かに笑みが浮かんでいる。だが、笑い声は上げられなかった。目は、大きく見開かれている。そして、ようやく自分の思考が鈍っていなかったことに気づいたのだった。

もしも、棺に蓋（ふた）がしてあったならば、彼はそれをひと目で《棺》と認めたに違いない。だが、実際には、棺に蓋は、いや、中にあるべき死体さえもなかったのである。

ナイトウォーカーは、身体中の毛が逆立つのを感じていた。見てはならないものを見てしまった。そういった後悔が、容赦（ようしゃ）なく彼に襲いかかった。あるべきはずのワードナの亡骸がない。これが何を意味しているのか。嫌だ。考えたくない。

やっとのことで、視線を忌（い）まわしき棺から引き剝（はが）した彼は、さらに信じ難い光景を目にする。ああ、何ということだ！　この玄室に自分以外の何者かがいたのだ。瞬間、ナイトウォーカー

は、己れの死期が近いことを本能的に悟った。理屈ではない。盗賊の持つ、鋭い勘が、そう告げている。持ち前の運の強さも、今回ばかりは役に立たないであろう。もしも、万が一、生き延びることが許されたとしても——これまでと同じ生活は送れまい。

当り前のことだ。

悪の大魔道師・ワードナの復活を、この目で見てしまったのだから。

6

それは、召喚ではなかった。

召喚とは、別の場所にいる者を特定の場所に呼び出すことを指すに過ぎない。もしも、それが派遣した者を呼び戻す行為であったなら《召還》と言わなければならない。

ナイトウォーカーは、自分が見ている恐ろしい儀式を《召還》だと思ったのは、何も彼の自慢の勘からではない。奴——ワードナの足元に描かれている魔法陣の放つ光から、人間の僧が突如として現れたからなのだ。

例えばナイトウォーカーのように魔術に興味がなくても、魔法陣が、この世と魔界とを結ぶ《門》であることは知っている。通常、魔界に生きる大いなる力を宿した者——多くの場合、それは悪魔だ——を呼び寄せるため、魔法陣は使われる。だが、ワードナは、魔界にいないは

ずの人間を呼び出した。一体、これが何を意味するのか。

善行をなす者たちの手で、仮初めの生命が断たれることを、ワードナは不思議な力――ああ、これも魔除けの力なのか！――によって、事前に察知していた。

ワードナは、死を恐れはしなかった。当然だ。彼を本当に殺すことなど、人間どもにできるはずはないのだから。しかし、それによって、彼が邪悪な力によって創り出した《魔法生物》や、苦労して育て上げたあらゆる種族までもが全滅の危機に瀕してしまうのは避けたかった。

そこでワードナは、迷宮の中で最も魔力が強いと思われる場所を幾つか選び、そこに魔法陣を描いて、忠実なる下僕たちを魔界へ避難させておいた。

《召喚》ではなく《召還》。

ナイトウォーカーが、そう思ったのは、こういうことを一瞬にして想像したからのだ。もちろん、単なる推測に過ぎないが。

恐れおののく、か弱き盗賊の前で《召還》は続く。魔法陣は光を失ったが、呼び戻したばかりの五人の僧侶を従えたワードナは気にした風もなく、禁じられた呪いの言葉を漏らす。

おお、それは、人知を越えた次元に送り込んだ、邪悪なる下僕を呼び戻すための呪文なのであろう。

ナイトウォーカーの掲げる松明の紅い光に染められていた魔法陣が、再び輝きを取り戻した。強く真っ直な光の帯は、闇を貫き、瘴気に舞う砂煙を美しく演出する。それは、天女のまとう

薄絹のように幻想的だった。

魔法陣の放つ光が凝縮する。

邪悪な闇に、光が押しつぶされてゆく。

光が、何か別のものへと変わろうとしていた。

と、僧侶のひとりが、それを拾い上げ、喜々とした表情でワードナを振り返った。悪の大魔道師は、それに頷いたようだった。

限界だった。ナイトウォーカーは、もうこれ以上を見ていることができなかった。逃げようとした。急激な持ち主の動きに、松明が、ごうと唸りを上げる。彼には、逃げ出すことが自分の死期を早めることにつながる、という確信があった。それでも逃げようとするのは、この悪夢のような光景を、もう見ていたくない気持ちが、死の恐怖を上回っていたからに違いない。

こんな呪われた儀式に立ち会うぐらいならば、死んだ方がいい。追ってきたいなら、追ってくるがいい。殺そうとするなら、殺すがいい。ナイトウォーカーには、これが、自分が人間として死ぬことができる最後の機会だと思えて仕方がなかった。

涙が流れてくる。体内に満ちた強烈な恐怖が、次々と目から溢れ出していく感じがする。

肉に奥にある、どっしりとした骨が、華奢な吟遊詩人の爪弾く竪琴の弦のように震える。

しかし、ワードナはおろか、魔界より呼び戻された僧侶たちも、ナイトウォーカーを追おうとはしなかった。小賢しい盗賊の一匹、逃げられたところで、悪の大魔道師の復活は止められ

ない――そういうことなのだろうか。

だが、ナイトウォーカーは、これで自分が死から免れたとは微塵も思ってはいなかった。

玄室を出る時に、

〝哀れな小羊よ。この薄汚い迷宮に、死を撒き散らすがよい〟

耳元で、そう囁かれたように感じたからだ。

第1章

肉塊

1

玄室の扉を蹴破(けやぶ)ったナイトウォーカーは、素早く辺りを見回した。誰もいなかった。孤独が恐怖を増幅させ、気が狂いそうになってくる。

耳の奥で、破裂寸前の心臓が、熱い鼓動を繰り返しているのが感じられる。

彼は、再び辺りを見回す。やはり、誰もいない。また、見回した。さらに見回す。見回す。見回す。見回す。見回す。見回す。見回す。見回す。見回す。見回す。見回す。見回す。見回す。見回す。見回す。誰もいない。誰もいない――。

周りには誰もいない。だが、見回すことを止めようとはしなかった。自分は、今、独りなのだ、という現実を認めたくない気持ちが、彼を半ば狂った行動へと駆り立てているのであろう。もしも、このまま誰も現れなかったとしたら、彼は死ぬまで辺りを見回し続けていたかもしれなかった。

と、ナイトウォーカーが、冷水を浴びせられたように身体を硬直させ、その狂気の行動を終了させた。彼に近づく足音が聞こえてきたからである。仲間たちの懐かしい足音――おお、そうだ。彼らは臆病者(おくびょうもの)なんかではなく、大切な仲間なのだ!――ではなかった。なぜなら、彼の仲間は、玄室の中にはいないはずなのだから!

背後で、石の扉が重い音を立てながら、開きつつあった。ナイトウォーカーの悲鳴は、から

からに乾いた喉(のど)のためか、調子はずれの笛の音のようだった。もう、誰かが来るのを待ってなどいられなかった。

逃げなければ！

萎(な)えた気力を振(ふ)り絞(しぼ)り、ナイトウォーカーは走り始めた。風を受ける松明(たいまつ)が、ごうごうと燃え盛る。彼は、そんな松明が邪魔に思えてならなかった。追ってくるであろう奴らに、自分の位置を教えるようなものだ。そんなことが脳裏を過ぎり、彼は、それを投げ捨てた。

すぐに呼吸が乱れたが、止まって休むわけにもいかない。走り続ける。

一体、自分はどこに向かっているのだろう。ふと、そんなことを考えた。仲間のところか？そういえば、あいつらは、どこにいるのだ。この地下十層を巡回しているはずではないのか。まさか、自分を置いて、先に地上へ戻ってしまったのでは……。いや、そんなことはあるまい。なぜなら、奴らの内の三人は、属性が《善》なのだから。まだ、巡回しているに決まっている。

しかし、ナイトウォーカーは、そんな仲間たちを求めて走り続けているわけではなかった。力のない者ばかりが何人も集まったところで、どうなるというのだ。ワードナを倒そう、などという馬鹿者がいるかもしれない。

この《ピラミッド》は、大きく六つの地域に分けることができる。まず、中心の玄室。それを取り巻く通路。さらに、その外の通路が、それを取り巻き、次の通路が……という具合いに、五つの層が存在している。玄室と、それを取り巻く五層の通路——合計六つというわけだ。

各通路には、内と外とに移動するための扉がそれぞれ一ヶ所ずつあり、そこには《ピラミッド》を護る守護者が配置されている。恐怖に脅える、か弱き盗賊は、仲間ではなく、この守護者に助けを求めようとしているのだった。

何も知らずにここを巡回する仲間たちを、どうするのか。彼は、放っておくつもりでいた。このことを知らせるのは、奴らよりも、守護者の方がいい。それに、うまくいけば、奴らがワードナの足止めになって、自分が生き延びる機会が増えるかもしれない。

走りながら、ナイトウォーカーは、冷静にそんなことを考える自分に驚いていた。

やがて、外側の壁にある扉が見えてきた。あの奥には、然るべき訓練を受けているはずの王国の戦士——内なる通路の守護者がいるはずだった。

だが、気になることがあった。

それは、あの忌まわしき玄室から出る時に耳にした、

〝哀れな小羊よ、この薄汚い迷宮に、死を撒き散らすがよい〟

そういう言葉を思い出したからだ。

2

「奴め、どこへ行きやがったんだ」

開いたままになっている石の扉から中を窺った後、《中立》の戦士は、憎々し気に言った。奴——とは、もちろん、盗賊・ナイトウォーカーのことである。彼がパーティから離れ、ひとりで悪の大魔道師・ワードナの玄室に入った後、他の五人は、ドワーフから依頼された仕事——地下十層の巡回をすることにした。今は、その仕事を終え、待ち合わせの場所である、玄室の扉の前にきたところである。ところが、ナイトウォーカーの姿が見えない。

「あいつ、財宝を見つけて、あたしらを置いてきぼりにしたんじゃないのかしら」

長い金色の髪を掻き上げて、同じく《中立》の女魔術師が続ける。

彼らは、ナイトウォーカーがワードナに遭遇したことなど知るわけもない。だから、彼がいないのは、その意地汚い考えから生み出された行動に過ぎない、と思ってしまうのも仕方のないことであろう。

《中立》の彼らが、ここまでナイトウォーカーを悪く言えるのも、今回の彼の行動が今まで以上に自分勝手なものだったからだ。

職もなく放浪している者たちに仕事——それもこんなに割のいい——がくるなど、普通は有り得ない。この仕事を定期的にこなしていけば食うには困らないし、このまま、この地に住むことだって充分可能だ。しかし、それには与えられた仕事を必要以上にきっちりとやり、〝迷宮管理職〟にあるというドワーフの信頼を得なければならないだろう。

ところが、あの薄汚い盗賊ときたら——ああ、奴が〝仲間〟であることを思い出す度に寒気

がする！——これを放り出して、財宝探しなどを始めやがったのだ。《中立》の戦士と女魔法使いにしてみれば、確かに一獲千金を狙ってみたい気持ちもある。しかし、それも時期によるのだ。もしも、玄室に入ったことがドワーフに漏れたりしたら……。そう考えてしまう。だから、彼らは、ナイトウォーカーの意見に同意を示さなかったわけである。

「俺は、あいつを信じる」

短く言ったのは《善》の侍だった。いささか不満気な口調だが、仲間の悪口を聞いていられないのであろう。

そんな侍に、先の女魔法使いは語気も荒く、

「あたしたちは、あいつに〝臆病者〟とまで言われたのよ。悔しくないの？」

と言い、開けっ放しになっている玄室の扉へ、もう一度鋭い視線を向けた。

「だが、奴に助けられたことだってあるだろう。八日ほど前のことだったか、あの——」

「やめてよ、その話は！」

《善》の戦士の言葉を、女魔法使いが遮った。彼女にしてみれば、よほど厭なことがあったのであろう。話から想像すると、その時、この女魔法使いはナイトウォーカーに助けられた、ということになる。

「いずれにしろ、待つしかない。そういうこと——」

最後のひとり——《善》の僧侶が言いかけて、そこで言葉を切った。

五人の間を沈黙が支配した。ふたりの戦士の目は細くなり、侍は静かに剣に手を掛ける。
女魔法使いは、自慢の髪を掻き上げる手を止めた。
「悲鳴……かしら」
「少なくとも、俺にはそう聞こえた」
侍は、遠く広がる闇に視線をやる。
「守護者の方からのようだ」
僧侶の言葉で、五人は走り始めた。

3

それは、ふたつの肉塊だった。
ひとつ目は、鎧を灼かれていた。通常の炎で同じことをしようとするならば、何千度もの温度が必要であるはずなのに、まだかなりの熱を持ったそれは、確かに灼かれていたのだ。原因は明らかだった。魔法の炎によって、この男は殺されたのだ。
辺りに、肉の焦げる、厭な臭いが充満している。肉塊を包んでいる鎧は、半分、外された感じ——いや、この場合、むしり取られたといった方が適切か——になっており、そこから見える衣服も切り裂かれていた。その奥に、鮮やかな桃色が、黒ずんだ血を伴って覗く。

つい先ほどまではあったはずの右腕は、肩から消えていた。如何なる者の仕業であろうか。この男を殺した者は、この屈強な戦士の腕を——ああ、これは単なる推測なのだが——いとも簡単に引きちぎったのだ!

顔も酷かった。短めの金髪に、蒼い瞳。美男子とは呼べないかもしれないが、決して魅力のない顔ではない。街の市場で微笑めば、薄紅に頬を染める女性だっているに違いない。

しかし——何ということだ! 親が見ても、今の彼を、これが我が子だとは思うまい。

頭の皮は剝され、真っ白な頭蓋を晒け出している。顔を覆う肉の大部分は削ぎ落とされた風になっているが、よく見れば、それは喰いちぎられたことが判る。人間を喰う者が、この巨大な墓の中にいるのかどうかは疑問であるが、彼の顔の肉は、明らかに喰われたのだ。なぜなら、その形跡が——認めたくはないのだが、くっきりと歯形が残されたいるのである。しかも、それはまるで人間のものであるように見えるから始末が悪い。

奇跡的に残された、無傷の鼻が冗談のようだった。

右の眼球は無かった。これも喰われたのだろうか。

もうひとつの死体は、先の戦士のような充分な装備をしていないためか、肉体の損傷が激しかった。辛うじて身体の要所を護るに過ぎない皮鎧は、無惨にも原型を留めていない。

その肉塊は、血溜りの上に、寂しく浮いているように見えた。こちらは、戦士とは違い、炎による攻撃は受けていない。実際は判らないが、見た感じでは、そう思える。

残忍なる肉食鬼は、柔らかな腿の肉を喰らっていた。仰向けに倒された哀れな獲物は、そのままの姿勢で無理やり腿を喰われたのだろうか、左脚が奇妙な角度に捻れていた。右脚は、膝の関節が逆に曲がっている。こちらの脚も、やはり柔らかい腿だけが肉食鬼の食料だった。腕は左右両方が無い。辺りを見回してみても無駄だった。見つからない。仲間への土産なのか、それとも勝利の証なのか。いや、人知を越えた怪物のすることなど、ちっぽけな人間の推し量れるものではない。確かなのは、奴（あるいは奴ら）が持ち帰った、ということだけだ。何とも恐ろしいことだろう。

破かれていた。この表現が適切なのは、彼の腹だった。皮膚は突き破られ、肉はえぐられ、内臓が引きずり出されている。

これが死体でなかったら、女性が喜びそうな美しい桃色をした箇所もある。真っ赤な血を弾力のありそうな表面に浮かせ、腸が冷たい床に放置されている。

むっとする血臭が、動かぬ大気に、ねっとりと溶けていた。大きく吸い込むと、喉の奥で血の味がしそうなぐらいだ。

内臓は喰われた形跡が無い。ただ引きずり出され、見せ物のように並べてあるだけである。先の戦士は、食欲を満たすために喰われた。しかし、この男は、たまたまそこに居合わせただけで、奴らの遊びのために殺された。この光景を見ていると、ふと、そんな考えが脳裏を過ぎるのも、無理のないことかなのしれない。

不思議なのは、右耳がちぎられて近くに転がっているだけで、その顔が無傷な点だろう。
大きく開かれた目と口。迎えた死の凄まじさに身震いこそするが、我々は見紛うわけもない。
知っているのだ、この顔を！

ああ、哀れなり、ナイトウォーカー！　そして、内なる通路の守護者よ！

4

駆けつけた五人が見たのは、この世のものとは思えない光景だった。

沈黙は、立ちこめる血臭に支配されている。

永い刻が経って、ようやく《善》の戦士が口を開いた。「酷いな、こいつは」

目を死体から逸し、隣にいる侍に同意を求めようとした。しかし、彼は無言であった。ただ、怖い視線を、つい今しがた仲間だったはずの物体に落している。

「しばらく、肉は喰いたくねえな」

《中立》の戦士が言った。

凄まじい光景の割には、冷静な言葉だった。戦乱もなく明け暮れた日々を送ってきた彼らであるが、それでも、死体を見たのは初めてではないからだった。戦がなくても、人は死ぬのである。だから、死体に対する免疫はあるのだ。

それは、夜半の山の中。彼らは、そこで襲ってくる山賊たちを生かしておくほど優しくはない。《善》とはいえ、《悪》に対しては人殺しさえも辞さないのである。

それは、街の中。何らかの罪により賞金首となった男を殺したこともあった。彼の犯した罪名は知らない。彼の素性も知らない。知ってしまうと躊躇してしまうかもしれないから。だから、それを聞かずに殺す。金のために。生きるために。ただし、悪いことだけはしなかった。それが誇りだったからだ。

そんなわけで、ここで冷たくなってゆく死体を見つめる五人は、死体を見ることに、それほど抵抗はなかったのである。

ただし、ショックであったことには間違いない。当然のことだ。どんな悪口を言おうとも、これまでを共に生き延びてきた仲間が死んだのだから……。

「そんなこと言ってる場合じゃないわ！」

比較的冷静に状況を受け入れる彼らに対して《中立》の女魔法使いが鋭く言った。「こんなことをした張本人が、近くにいるかもしれないんだから――」

「その通りだ」

無言で死体を見つめていた侍が、それに同意した。時には疎ましく思えるナイトウォーカーだったが、一緒に旅を続けてきた〝仲間〟なのだ。「友は殺された。許してはおけない。然るべき報いを与えねば――」

そこで侍が言葉を切ったのは、目の前の女魔法使いが笑い始めたからだ。
「何がおかしい」
自分は彼女に同意したのだ。笑われる筋合いはないはずなのに……。
「あたしが言いたいのは、復讐なんて莫迦げたことじゃないわ」《中立》の女魔法使いは冷たく言う。
「何っ？」
「あたしは、死ぬのは嫌。あんた、相手が誰だか判ってるの？」
侍は答えなかった。答えなかったが、それは誰でも容易に想像できる事柄だった。百年前、この地を騒がせた悪の大魔道師・ワードナが復活したのだ。もちろん、単なる推測に過ぎないが、それ以外に、彼らは納得できる答を思いつかなかった。
「仇は討たない——そういうことか？」
侍は、傍らの女魔法使いに低く訊いた。怒りを抑えているためか抑揚がない。
「そうよ。なぜ、あたしが、あんな奴のために危険を犯さなくちゃならないの」
「仲間だからだ」
「仲間？　笑わせないで。死んだ人間に義理立てするほど、あたしは甘くないわ」
聞いて、侍は剣に手を掛けた。重い鎧に包んだ身体が細かく震えている。
対する女魔法使いは、目を細め、口元に挑発的な笑みを浮かべていた。

「止めんか、つまらんことで」
そんなふたりの間に、《善》の僧侶が割って入った。年齢で一番上の彼は、しばしば起こるこういった争いの仲介役なのだ。
「つまらんことだって？　俺は――」
「つまらんことだ」
侍の言葉を遮り、僧侶は言い切った。「何事も己れの尺度で計ってはならぬ。戒律の違う者に言うことではないぞ」
「ならば、あんたは――」
侍の視線が、僧侶のそれと激しくぶつかり合った。「戒律が俺と同じあんたは、どうなんだ」
「ワードナに勝てるなど思ってもいない」
僧侶は冷たく言った。そして、無言の侍に向かって優しく微笑みかけると、「だがな、男ならやらねばならん時もある」
「俺も行くぜ、男だからな」
侍の肩を軽く叩き、《善》の戦士も言った。
《善》の三人は互いに頷き合うと、次第に冷たくなってゆく死体に背を向け、歩き始めた。と、二、三歩、足を進めたところで、侍が、残るふたりを振り返った。
《中立》の戦士と視線が合った。すると、彼は目を伏せ、申し訳なさそうに、

「すまねえ」と呟いた。

「気にするなよ」

侍は、優しく言うと、今度はその隣に立つ女魔法使いに目を移した。「良かったな、あんたは女に生まれて――」

第2章

騎士

1

騎士になることを夢みる若者がいた。
名は、アイルという。
今は、剣と魔法とが世界を支配する時代である。だから、この剣に限っていうならば、誰もが手にする機会を与えられているも同じだった。戦士が世に溢れている、ということになる。名乗ろうと思えば、己れに《戦士》や《剣士》の称号を与えることは不可能ではなかった。不可能ではないのだが、そういった環境にあっても、それを誇りにする者がいないのは、戦乱が、この百年の間なかったからであろう。戦う対象のいない《戦士》など、無意味な存在でしかないのだから。
しかし、《騎士》は違った。その称号が誰に与えられたか、というたったそれだけの違いで、背負うものや存在価値が《戦士》とは大きく異なってくるのである。王に認められてこそ、王国からその称号を与えられてこそ《騎士》となることが可能なのだ。
剣をうまく扱えるか、戦場で何人の敵を倒したか、などのことは《騎士》となるのに関係ない。いや、関係ないこともないが、それ以上に大切なものがあるのである。
騎士には《騎士道》なるものが課せられている。勇気を持ち、礼儀正しく、名誉を重んじる、騎士としての気風が《騎士道》だ。これを備え、守り通せる〝力〟を持つことが騎士への第一

歩であろう。後は、王に認められさえすればいい。
アイルは、こういった気風が自分に備わっていると思っていた。この世に生を享けてから二十四年。思い返してみても《騎士道》の指す気風に反した行動は取っていないとの確信があった。ただひとつを除いて。
後は、如何にして王に自分の力を認めてもらうか——それだけの問題だと彼は思っていた。自分は、騎士となるに値する〝力〟は持っているはずなのだから。しかし、それが単なる過信に過ぎないということを悟る時がきた。
あれは、今から五年前のことだった。アイルが十九になった丁度その日である。彼は、忠誠を誓うに値する王を捜し求める旅の途中、女の悲鳴を聞いた。ここは、人気のない山の中だ。不審に思ったアイルは、その後も断続的に続く女の声を頼りに、用心深く進んでいった。
小径を登っていくと、見晴らしの良い広場になっていた。そこで、男が三人、アイルに背を向けている。その誰もが、ぶ厚い肉を持った《剣士》だった。ひとりは、そこで膝をついた状態で体を動かしていた。他のふたりは、その両脇に腰を下ろし、それを見守っている風だった。真ん中のその男の両脇からは女の白い足が力なく突き出している。
男に腰を引き寄せられるたびに、女の短い声が上がった。やがて、その嫌悪の悲鳴は、甘く濡れた吐息に変わり始める。女の体を知らぬアイルであったが、そこで何が行われているかは理解できた。先に悲鳴を上げていた女は、この三人の男たちに乱暴されているのだ。助けなけ

れば！
初めて見る光景に興奮してか、剣を抜くのももどかしく、アイルは叫んだ。
「我こそは、アイル・ゲルグラードなり！　神聖なる騎士道に則り、汝らに戒めを与える。己れの過ちを悔い、悪夢と苦痛を受け入れるがよい！」
相手は三人。しかも、その体格を見れば、並々ならぬ《剣士》だということが判る。不意討ちをかければ、少なくとも、その内のふたりは始末できたであろう。しかし、アイルは、それをしなかった。正々堂々と戦うことこそ《騎士》としての勤めなのだから——。
抜いた切っ先を男たちに向け、アイルは胸を張った。だが、振り向いた彼らは、驚きもしなかった。つまらない芝居を見るような、そんな目つきで、アイルを見ているだけだ。
「その女性を放してやれ！」
もう一度、今度は先刻よりも、もう少し大きな声で叫んだ。
「何だ、お前は？」真ん中の男が言った。状況を把握していないようだった。
「騎士——とか言ってるぜ」アイルから見て右の男が、おもしろそうに言う。
「騎士が、こんなところにいるかよ」最後に言ったのは、左の男だ。髭を撫でながら、アイルの姿を値踏みしている。「鎧もない。馬もない。おまけに、何だ、その剣は？　どこで拾ってきたんだ？」
「うるさいっ！」

「兄ちゃん、仲間に入れてほしいんだろ?」
「黙れっ!」
「危ねえもん振り回すんじゃねえ、怪我(けが)するぞ」
「恐れをなしたか、腰抜けっ!」
そう、アイルが叫ぶと、真ん中の男がようやく立ち上がった。薄汚れた上着を着ているだけである。右手には、ごつい剣が握られていた。
「あんまり、いい気になるんじゃねえぞ」
低い声で言いながら、鋭い眼でアイルを睨んだ。
「正々堂々、勝負しろ。俺が勝ったら、その女の人を放してやれ!」
「おもしれえ。だが、お前が負けたら、どうするんだよ、え?」男が歯を剝(む)いた。
「好きなようにしろ。殺されても文句は言わん」
「ほう、いい心掛けだ。ますます、おもしれえ。騎士殿の腕前を拝見しようじゃねえか」
そう言って、男は、ごつい剣を構えた。

2

そんな五年前のことを思い出すたびに、アイルの胸は小さく痛んだ。

自分は《騎士道》に反したことをしてしまったのではないか。そう思うのだ。もしも、自分が、あの女性の悲鳴を聞かなかったとしたら、どういった展開になっていたのだろう。いつも、そんなことを考えてしまう。アイルが、そこに現れたことで、結果的に彼女を、より苦しめてしまったとしたら……。

あの行為は《騎士道》に反したものであったのだろうか？

いや、違う。自分のしたことは正しかったはずだ。間違ってはいない！　悪いのは――そうだ、あの三人の男たちだ。自分は……力が、そう、力が足りなかっただけなのだ。

アイルの戦った男は強かった。

太い首に、ぶ厚い胸。鍛え抜かれた筋肉に押し上げられ、熱い日差しに灼かれた肌が今にも破れそうだった。腕も太い。女性の腰ぐらいの太さはあるだろう。その二本の腕に支えられた剣も太かった。剣というよりも、鉄の塊に近い。辛うじて剣としての形を保っているのは、切っ先の部分と、柄の存在だけだった。こんな物で殴られたら即死である。

アイルは、自分の存在が急に小さく感じられた。《騎士道》を振りかざしたことで、死ぬ運命になってしまうのかもしれない。いや、きっと死ぬことになるであろう。

騎士を目指す彼は、自分の剣の腕前を知っていた。昔は、自分が一番強いとは思っていた。恐れることを知らなかった。しかし、村を出て、旅を続けるうちに、それが間違いであることに気づいたのだ。街の酒場に寄ってみれば、アイルの太刀打ちできない人が、それこそ溢れか

えっていた。失望があった。己れが備えている気風だけで勤まるほど、騎士は甘くなかった。だが、アイルは諦めなかった。修練を積めば、必ず報われると思ったからである。運が良かったのは、その酒場の主人が剣士だったという経歴を持っており、そこでアイルを働かせてくれたことだろう。昼間は主人の指導の元で剣の稽古、夜は酒場で働く。この繰り返しの日々が三年近く続いた。その頃には、この酒場の主人にも、ここを訪れる旅の剣士たちにも負けない腕となっていた。出発の時は来た。今こそ、《騎士》になるのだ。

アイルは主人に別れを告げた。

そんなことがあってからの、男との決闘だった。今では、剣の腕には多少の自信があった。だが、それがいけなかった。力がついた分だけ、相手の実力を推し量る能力も同時に備わってしまったのだから。強くなったはずの自分だが、それでも己れの死を予感してしまうのは、目の前の男が並の強さではないからであろう。発散する闘気の量が桁違いなのだ。

上には上がいる。

その時のアイルの心境をひと言で語るならば、これが一番適切であるに違いない。死にたくない。逃げ出せば、殺されることはないだろう。しかし、《騎士道》に反することになる。殺されない代わりに、今まで自分がやってきたことが意味をなさなくなってしまう。

〝生〟を取るか、騎士としての〝死〟を取るか。アイルが選んだのは〝死〟であった。騎士としての称号こそ授かっていないことが心残りではあったが、騎士のような死に方ができるので

あれば本望だ。だから、そちらを選ぶ。

萎(な)えそうになる気力を振り絞り、アイルは突進した。肩に溜めた剣を、渾身(こんしん)の力を込めて打ち下ろす。相手の左肩を狙った攻撃だ。鈍(にぶ)い衝撃があった。しかし、それは肉を斬り、骨を断ち切る、あの感触ではなく、何かとても硬いものを叩いた時の手応えだった。男が、その、ごつい剣でアイルの一撃を軽がると受け止めていたのである。

アイルは、次の攻撃に移る。今度は切っ先を左後方に向け、充分に力を溜めてから、横薙(よこなぎ)にした。狙うは、がら空きの右脇腹だ。

勝った！　という思いがあった。しかし、信じられない早さで男の剣が、この一撃を防いだのだ。まるで、そこを攻撃されることが最初から判っていたといわんばかりの無駄のない動きだった。アイルは勝てないという思いを強めたが、攻撃の手を緩(ゆる)めるわけにはいかなかった。相手に反撃の機会を与えることは、すなわち自分が死ぬ時であるからだ。

次は右足を狙った。

その次は左腕。

今度は頭。

胸。右肩。腹。左膝。右腕。首筋――。

どれもが完璧な攻撃のはずだった。なのに、そのすべてが男の身体に届かない。何故だ？

しばらく剣を打ち込み続けたアイルは、ようやくその理由を悟った。簡単なことだ。実力が

違いすぎるのである。それに気づいても、アイルは攻撃を止めない。止めたら殺されてしまう。目の前で辱めを受けた哀れな女性も救うことができない。

手が痺れてくる。剣を持つ手に感覚がなくなってきた。何度目か憶えていないが、男の右肩を狙ったアイルの剣が、弾かれた。掌から剣が落ちた。慌てて拾おうとする。そのアイルの髪は男に鷲掴みにされ、引き寄せられた。目の前に男の貌がくる形になった。

「俺の勝ちだな、騎士殿」

男は下卑た笑いを浮かべていた。

他のふたりも、大声で笑っていた。敗北を認めないわけにはいかなかった。

3

何という屈辱だろう。

あれから五年経った今でも、このことは忘れられない。思い出すたびに、心の奥で生木を燃やされているような感じがする。

「好きなようにしろ。殺されても文句は言わん」

そう言ったのは確かだし、騎士としての地位こそないが、誓いが神聖であるのも判っている。しかし、世の中には、殺されることよりも辛く、苦しいことがあるのだ。

男はアイルの胸倉を掴み、仲間のふたりのいる方へと引きずっていった。そのふたりが立ち上がり、アイルの周りに集まった。

「さてと、騎士殿には、何をやってもらうかな」

「好きなようにしろ、と言っていたな」

「殺すなんてえのは、つまらんしよ……」

そんなことを口々に言い合っていた。相変わらず胸倉を掴まれたままのアイルは、視線を地面に落とした。全裸の女が横たわっている。立てた両膝は大きく開かれたままだった。薄く汗を掻いた大きな胸は緩く上下している。目は中空を虚ろに彷徨い、涙の渇きかけた頬には砂がこびりついていた。

申し訳ない気持ちが、アイルの心に、ふと生じた。自分は男たちを倒し、この女性を救うつもりでいた。《騎士》を目指す者として、当然の行為をしようとするはずだったのだ。ところが、自分に騎士としての〝力〟がないばかりに――。ああ、情けないことだ。

涙が溢れそうになった。か弱い女性に乱暴するような男に負けてしまったのだから無理もない。この女性も、そして自分も、やがて殺されるであろう。もしも、自分がここに現れなかったら、この女性は助かったかもしれない。そうなったら、直接的ではないにしろ、自分が彼女を殺したことになる。何ということだ！

「――いてみろ」

　ふいに耳に入ってきた男の言葉で、アイルは我に返った。足元の女性から目を離し、自分の胸倉を掴む男の貌を見た。笑っている。自分が何を言われたのか判らないため、アイルは、両脇に立つ他のふたりの貌も交互に見た。やはり、笑っていた。

「聞こえなかったか？　この女を抱いてみろ、と言ったんだぜ」

「な、何を――」

「まさか、騎士殿が約束を破るとは思えんがなぁ」男は、にやりと笑う。

「俺は何をされても構わん。しかし、人を傷つけるような真似は――」

　聞いて、男が頷いた。

「うむ、さすがは騎士殿。どんな時でも他人のことを心配なさるとは見上げたもの」

　そう言うと、男は仲間に何やら合図を送った。髭を生やしたひとりが、それに頷く。アイルは、これから何が起こるのか、まったく想像がつかなかった。と、その髭の男が、腰から剣を抜き、横たわる女性に突き下ろしたではないか！

「やめろ――っ！」というアイルの叫びと、

「ひいっ！」という女の悲鳴は同時だった。

　剣は、女の右肩すれすれを通過し、地面深くに突き刺さっていた。髭の男は跪き、女の顔を覗き込むようにして言った。

「この騎士殿がな、お前を抱きたいそうだ」

「ち、違う。俺は――」

横から口を出そうとしたアイルは、思い切り腹を殴られ、言葉を失った。

「なあ、頼むよ」

髭の男は喋り続ける。それは、囁くような口調に変わっていた。「いい、と言ってくれよ。なあ、そうすれば生命は助けてやるぜ」

それを聞いて、女の眼に光が戻った。

「本当？　本当に生命を助けてくれるの？」

「ああ、本当さ。俺たちゃ、嘘は言わねえ」

「抱いて。好きなだけ、あたしを使って……お願い、生命だけは……助けて」

聞いて、三人の男たちが笑った。

「さあ、決まりだな、騎士殿。この女は、あんたに抱かれたがっているぜ」

「ひとつだけ、聞いておく」

胸倉を放されたアイルは、男を睨んだ。「本当に、彼女を助けてくれるんだな？」

「ああ。何なら誓ってもいいぜ」

男が、歯を剝いて笑った。「さあ、騎士殿。ご自慢の《剣》で、この女を成敗してくれぬか」

4

結局、あの女性も自分も、生命だけは助かった。ただ、大切な何かを失くしてしまったように思えてならなかった。
アイルの腕の中で怯(おび)える女の震(ふる)えは、いつしか恍惚(こうこつ)の波と化し、息を荒く弾ませていた。それが、彼には哀れでならなかった。この女性は、愛してもいない男に身を任せ、陶酔しているのだ。信じられないことだと思った。愛の無い行為など、何の意味もなさないと信じていたから。そう、その瞬間までは——。
それは突然、訪れた。いや、本当は突然ではなかったのだが、アイルがそうと気づかなかったために、突然のように感じてしまったのだ。
背骨が甘く溶け、それが肉に染み込み、全身に広がってゆく。何だ、この感覚は?
アイルは戸惑う。そして、これが快楽なのだと悟り、愕然(がくぜん)とした。見ず知らずの、愛してもいない女性と汚(けが)れた悦(よろこ)びを分かち合っていることが信じられなかったのだ。何故……これでは、この男たちと何ら変わりはないではないか!
悲しかった。アイルは、懸命に悦びを拒否しようとした。しかし、それは我慢すればするほど増大されてゆくのだ。眼の前が真っ白になったその瞬間、体の奥で何かが弾(はじ)けた。続く、後

頭部への衝撃。意識がなくなった。
眼を開くと、女の顔があった。つい先ほどまで自分の腕の中にいた女性の膝に、アイルは頭を預けていたのだ。美しい人だな、と彼は思った。そして、何故こうなったのかを思い出そうとした。思い出した。あの三人の男たちに――！
素早く起き上がり、剣を探した。剣は近くに落ちていた。だが、男たちの姿は、どこにもなかった。それを知ると、アイルは身体中から力が抜ける感じがした。後頭部が、ずきずきと痛んだ。奴らに殴られたのだろう。それで気を失ったのかもしれない。
「助けてくださって、ありがとうございました」
そういう女の声で、アイルは振り返った。先の女性が立ち上がり、頭を下げている。それを見ていると、アイルは申し訳ない気持ちで胸が張り裂けそうだった。
「俺は――助けてなんていない」
アイルは自分の目から涙が溢れてくるのを感じていた。「君には、すまないことをしてしまった。この通りだ」
片膝を地面につき、頭(こうべ)を垂(た)れた。謝って済むことではないと判っていたが、謝らずにはいられなかった。そんなアイルを、彼女は不思議そうな目で見ていた。
「ああ、そんなことはしないでください。あなたは私を助けて――」
「違う！　俺は、あいつらを倒せないばかりか、君にまで、あんなことを……」

「いいえ、あなたが、ここに来てくださらなかったら、私は殺されていたことでしょう。あなたは命の恩人です」
「――――」
「確か、あなたは騎士様だとか――」
それを聞いて、アイルの胸は小さく痛んだ。
「違うんだ。俺は騎士なんかじゃない。ただ、騎士を目指して……」
「あなたは、もう立派な騎士です。そうでなければ、名乗りを上げ、あの男たちに立ち向かっていけるはずはありませんもの。あなたは騎士です――もしも、誰も認めなくても」

5

アリサ。
彼女の名前だ。あの近くの村に住んでおり、偶然、奴ら三人に出会ってしまったらしい。
彼女は、村に寄っていってほしいと言った。だが、アイルは、それを丁重に断わった。申し訳ない気持ちが強すぎて、とてもそんなことはできなかったからだ。そんな彼の気持ちを理解してか、アリサは、それ以上何も言わなかった。そして、ふたりは別れた。
「騎士になったら……行く」

それが、アイルの最後に言った言葉だった。彼女は、優しく微笑んだだけだった。

アリサ――。

美しく、優しい、そして強い女性だった。

旅を再開したアイルは、彼女のことが忘れられなかった。何度も進んできた道を引き返したい気持ちになった。どうやら、彼女を愛してしまったようだった。もう一度、逢いたい。だが、引き返しはしなかった。今は駄目だ。騎士となり、然るべき勤め――そう、あの三人の男たちへの戒めだ――を果たした後でなければ……。そうしたら、アイルは彼女の村を訪れ、求婚するつもりでいた。自分がしてしまったことに対する責任をとる意味もあるが、何よりもアリサを愛してしまったからである。

寝ても、起きても、考えるのは彼女のことばかり。こんな調子では、騎士になることなんて出来やしない。そこで、アイルは父の形見の剣を手に、ひとり黙々と稽古に励むのだった。

薄闇に向かって、切りつける。

激しく突く。

アイルの稽古の相手は、いつも無限に広がる空間だった。その実体のない存在は、彼の集中力で何者にも姿を変えた。人里離れた山中に巣食う悪鬼。深夜、墓場に現れる成仏できない亡霊ども。そして、満月の夜にのみ正体を見せる人狼。ただし、多くの場合は、そのような人知を越えた怪物ではなく生身の人間――アリサを辱め、自分に屈辱を与えた、あの三人の男たち

だった。恐らくあの中で一番強いのは、自分が戦った男であろう。だから、奴を仮想の敵とし、自己鍛錬を続けた。初めのうちは、まったく手が出なかったが、最近では、そうでもなくなった。三回の闘いで二度勝つことさえもあるぐらいだ。

自分の剣の早さが、相手のそれを完全に上回る日も近かった。豆が出来ては潰れ、それが固まり、その上に、また豆が出来る。そんなことの繰り返しで石のように硬くなった彼の掌は、毎日行われてきた自己鍛錬の凄まじさを如実に物語っていた。

もうすぐだ。アイルは思う。脳裏に、今は亡き父親の笑顔が浮かぶ。もうすぐだ。父さんの剥奪された騎士の地位と、失われた名誉を取り戻す日は近い。このピラミッドでの警備の仕事を――第二の守護者としての勤めを、あと一年ほど続ければ、きっと騎士への道が開ける。この迷宮を管理しているドワーフも、そう言ってくれた。待っていてくれ、父さん。そして、愛するアリサ……。

アイルの剣を振る手が止まった。

誰かが、こちらに近づいてくるのが感じられたのだ。今日から巡回の仕事を始めた、あの六人か――? いや、違う。寒気がするほどの邪悪な気配がする。禍々しい瘴気が、強烈な恐怖を運んでくる。アイルは、身体中の毛が逆立つのを感じていた。誰だ?

判っている。信じられないが、こんなことが可能なのは、この王国の誰もが恐れる、あの人物をおいて他には考えられない。悪の大魔道師ワードナが、本当に復活したのだ!

アイルは恐れはしなかった。騎士になれる機会が早まっただけだ、と思っただけだ。大きく息を吸い込むと、右手に持った剣を頭上に突き上げた。

「我は、中の道の守護者なり！　戻れ！　汝が独房へ！　これより先へは進ませぬ！　邪悪なる者よ、恐れるがよい！」

薄闇を漂う幽鬼のように、その黒い影は静かに近づいてくる。

悪の大魔道師・ワードナである。

騎士になることを夢みる若者がいた。

名は、アイルという。

夢は夢にして終わった。

第3章 金貨

1

これまでの思い出が、走馬燈のように脳裏を過ぎる——。
人間の死ぬ瞬間は、そういうものだと、ベルグは聞いていた。そして、それが真実であることを知ったのだった。

トレボーの城砦都市のすぐ近くに、その地下迷宮はあった。狂王・トレボーが、その波乱に満ちた人生の幕を閉じてから早七十年。国を治める者こそ代わったが、この城砦都市の呼び名には〝トレボー〟の冠が残されていた。もちろん、彼の偉大なる業績を讃えてのものでない。圧制を敷き、戦乱を呼び起こした、狂王・トレボーへの強烈な批判を込めて、そう呼んでいるのである。同時に、それは現在この地を治める王への牽制の意も含まれていた。
ベルグ・ジェスター。
それが彼の名前だった。ベルグが、この城砦都市を訪れたのは、二年ほど前のことだっただろうか。激しい夏は終わりを告げ、樹々の葉が沈みかけた夕日のように紅く染まりゆく季節、彼は、近衛兵になることを夢みて、ここにやってきたのだった。
近衛兵とは、王の近くに仕え、身辺の警護をするための兵士のことである。客観的に見てもそれほど魅力ある職とは思えないし、ベルグもまたそう感じていた。

それでも、なお近衛兵になろうとしているのは、彼の、男としての意地からである。
ベルグには、近衛兵になるための後ろ楯も、実績もなかった。そんな人間がいきなりなれるほど近衛兵は甘いものではない。だから、彼が初めにやることになったのは、城砦都市の近くにある地下迷宮の最下層の警護だった。この仕事で実績を積み、信用を得ることで、近衛兵への昇進を狙おうとしてわけだ。
彼は、剣技もこなしたが、それよりも強い精神力を必要とする魔術師の方に向いていることを迷宮管理職にあるドワーフは、ひと目で見抜いた。あと数年もすれば王国直属の魔術師にも引けを取らないのではないか。そのドワーフは、そう確信し、素性も知れぬベルグを、地下迷宮の最下層にあるピラミッドの守護者として雇うことにしたのだった。
何としても、近衛兵になってやる！
そういった意地が、ベルグにあった。
今度は、この男が死ぬことになる。

2

ベルグの父親も、トレボーの城砦都市の近衛兵になることを夢みた男のひとりだった。
ベルグは、そんな父親が大嫌いだった。彼に父親のことを尋ねただけで殴られた男がいるこ

とからも、それには深い事情があると容易に想像がついた。
ごく少数の親しい友人の証言を総合してみると、ネルド——これが彼の父親の名前だ。ベルグは、自分の父親のことを、こう呼ぶ——は世間一般で言われる〝悪人〟なのだと判る。もちろん、ベルグの言葉だけでネルドという人間を判断するのは早計ではあると思うが、こと人間関係や仕事に対する彼の生真面目さを考慮すると、信用せざるを得ないのだった。
ネルドは、城砦都市直属の戦士だった。だった、というのは、今はそうではないということだ。戦士の職を追われ、追放されたのである。
彼は、王の側近のひとりと仲が良かった。世辞と賄賂で、その腹黒い側近との仲を深め、王の知らぬところで悪徳政治を行ない、私腹を肥していたのである。ことあるたびに民衆に重税を課し、気に入った娘を街で見つければ何癖をつけて寝所へと連れ込んだ。
しかし、そんなネルドが裕福になっていったかというと、実際、そのようなことはなかったようだ。金の使い方が荒かったのである。同じ王国直属の戦士たちに酒を振舞うことも、しばしばだったし、時には遊廓を借り切って飽きるまで快楽に溺れたりもしたものだった。
これでは、いくら金があっても足りるわけがなかった。しかし、一定以上に税を上げることはできなかった。税を課す相手は人間という知能のある生き物だ。税率を上げ過ぎることは、自分の身の破滅につながる危険がある。ネルドは悪知恵の働く男であったから、これを良く心得ていた。生かさず殺さずで民衆を食い物にしていくつもりだった。

だから、ひと月に十日ほどは金が尽きる日があったのも仕方のないことだった。こんな時に、ネルドは、どうしていたのだろう。彼は、人一倍プライドの高い男だったから、他人から金を借りたりするのを嫌っていた。自分が金のないことを知られたくなかったのである。ネルドは、持ち金が尽きかけると、実家のある村へ帰ることにしていた。

彼の家は、とても貧しかった。それを知られるのが嫌で、ひとりで城砦都市に住んでいたのである。村は馬を飛ばして北へ三日ほどのところにあった。家には、十八の息子・ベルグと十六の娘・ファニィが、ふたりで住んでいた。母親は二年前に過労でこの世を去っている。

ベルグは、母親の死を機会に、この家を出るつもりでいた。母親が死んだのは、父・ネルドの所為だと思っていたし、事実、そうであった。女手ひとつで育ち盛りの子供を育てるなど、どれほどの苦労がいることか。しかも、彼女は元来、身体が弱かったのだから——。

城砦都市に行った切り戻ってこない夫を待ちながら、苦労を続ける母を見るたびに、ベルグは、父親と別れることを勧めるのだった。しかし、そのたびに彼女は、

「いつか、あの人は、あたしたちに気づいてくれるわ。その時までの我慢よ」

そう言うばかりだった。そして、死んでしまった。

ベルグは泣いた。それこそ涙が渇れ果てるまで。単に嫌っているだけだった父を憎み始めたのは、その頃からだった。妹のファニィを連れて、村を出ようとした。だが、それはできなかった。ファニィが、父に黙っていくことはできないと言い張ったからだ。

何故、あんな奴に義理立てしなければならないのか。ベルグには、それが理解できなかった。ファニィに訊いても、答えてはくれない。一体どうしてなのだ？

ベルグは、妹を置いて旅立つなどできるわけもなかった。理由は判っていた。妹であるにも関わらずファニィを愛していたからだ。彼女もベルグのことを愛してくれた。

ベルグは、ファニィが自分以外の男と話をしているのを見るだけで、激しく嫉妬した。その男を殺したくさえなったぐらいだ。そんなことのあった日の夜は決まって、ファニィを抱いた。それこそ狂ったように。抱けば抱くほど、愛しさが増した。底の知れぬ肉体に溺れ続けた。

彼は、自分を異常だとは思っていない。妹だから愛したのではない。愛した女が、たまたま妹だったということだけなのだ。だから、ファニィには苦労をかけたくなかった。彼女ひとりなら、自分の力で食わせていくことぐらいできる自信があった。

ベルグは朝から晩まで死にもの狂いで働いた。どんなに暑い日でも、どんなに寒い日でも。ファニィにだけは苦労をかけたくなかった。しかし、そんなベルグの思いは裏切られ、収入の少ない日も少なくなかった。ああ、今日は空腹を水だけで癒さなければならない。自分が情けなかった。抱き合い、すべてを忘れたかった。

金さえあれば、金さえあれば――。

金が欲しかった。だが、悪いことだけはしなかった。どんなに飢えていようとも。汚れた金に手を出してしまったら、自分はネルドと同じ存在になってしまうのだ、という思いがあった

からである。

稼げずに帰ってきたベルグに、ファニィが、ひと握りの金貨を差し出したこともあった。自分が働いて稼いだと言うこともあれば、父さんが、こっそりと置いていってくれたと言うこともあった。

彼女はそれ以上を語ろうとしなかったし、ベルグも聞こうとはしなかった。ファニィのことを信じていたから。ただ、父親が金貨を置いていってくれた、というのは絶対に嘘だと思っていた。あいつが、そんなことをしてくれるわけがないのだ！

ある日、父のネルドが家に帰ってきた。その時を境に、ベルグの、この男に対する憎しみは、殺意へと変わっていった。

3

「これから俺は、ずっとここに住む。判ったな」

有無を言わせぬ口調だった。家へと戻ってきたネルドは、そう言うと干し草の上にごろりと横になり、安酒を煽り始めた。たちまち、家の中に酒の臭いが充満した。

「何故、ここに戻ってきた」

ベルグが低く訊いた。「街での贅沢に飽きちまったのかよ?」

この男が、自分とファニィの、貧しいけれども平穏な暮らしを壊しにきたとしか思えなかったからだ。だから、知らず知らずのうちに、これまで以上の刺々しい言葉を吐いたのである。

ネルドは答えなかった。答えない代わりに、下卑た笑いを浮かべ、息子を見ていた。

ベルグには、それが不快だった。鳥肌が立つ。だから、この男が一番腹を立てそうなことを言ってやった。「近衛兵には、なれたのかよ」

ネルドの身体が微かに強張ったのを、ベルグは見逃さなかった。「へっ、予想はつくぜ。これまでの悪さがばれて、追放にでもなったんだろうよ」

言い終わった瞬間に、ベルグの顔めがけて酒の瓶が飛んできた。それを躱す。背中で、がしゃんという瓶の割れる音が聞こえた。

「な、何しやがる！」ベルグは、ネルドを睨んだ。

「うるせんだよ、てめえは――！」赤い顔が、睨んでいた。

「図星かよ。悪いことはできねえもんだな。大体、あんたは――」

ベルグが、そこで言葉を切ったのは、父親が干し草の中から立ち上がったからだ。

しゅっ！

手入れだけは欠かさなかったのだろう、ネルドは小気味いい音を立てて、長剣を抜き放った。恐ろしく切れ味の良さそうな剣である。それを右手で弄びながら言った。

「大人しくさせてやろうか、永久によ」

すうっ、と切っ先がベルグに向けられた。殺される。そう思った。実の親子とはいえ、この男ならやりかねないであろう。

その時である。

「やめて、ふたりとも!」

家に戻ってきたファニィが、殺気だったふたりに気づき、叫んだのだ。

「来るなっ!」

ベルグが叫んだが、ファニィは剣を持つ父親の元へ走り寄った。

「お願い、やめて」

父の胸にすがりつき、哀願した。それで、ようやくネルドの殺気が消えた。

「ひひひ。お前の頼みじゃ、断われんなあ」

言って、ネルドは剣を収める。と、それを見て、ふっと力を抜いたファニィが、ネルドに抱きすくめられた。左腕は白い首筋に巻かれ、右手は細い腰に添えられた。

ファニィの身体が強張った。父親の顔が近づいてくる。それから逃れようと娘は男の体の中で激しく身をよじった。顔が、さらに近づく。

「やめろっ! ファニィに何を——」

飛びかかろうとした。が、その足を止めた。ファニィが、ネルドの腕の中で身体の向きを変えていた。兄妹の目と目が合った。涙を溜めた妹の目が、来ては駄目、と語りかけてくる。だ

から、ベルグは足を止めたのだ。
ファニィは、背中から抱きすくめられた形で、震えていた。父親の無骨な掌に胸を強く握られている。「お願い……お父さん、やめて……ください――」
相変わらず、ネルドは下品な笑みを浮かべている。それを見て、ベルグの怒りが頂点に達した。腰の短剣を抜き、殺してやる、と呟いた。
「殺してやる」
今度は、はっきりと言った。
短剣を強く握りしめた瞬間だった。突然、ネルドが大声で笑い始めたではないか。
「何を怒っている、ええっ？　我が娘を腕に抱くのが、そんなにいけないことなのか？」
ベルグは沈黙していた。黙って、ただ睨むような視線を送っていた。ネルドは続ける。
「なあ、ファニィ。奴に言ってくれよ。お前が愛しているのは、兄貴だけか？　違うだろ、父さんのことだって愛しているよなあ？」
ベルグは、冷たい手で心臓を鷲掴みにされたような感じがした。ネルドは、〝兄貴〟と言った時、確かにこちらを見て、笑ったのだ。ああ、何ということだ！　この男は知っているのだ。
ネルドは腕をほどき、娘を解放した。
ファニィは動かず、立ち尽くしていた。
「どうした、大好きな兄貴のところへは行かないのか？　俺のすることは嫌なんだろうが」

ファニィの瞳が小さく揺れている。

「ファニィ……」

ベルグが小さく言った時、まるでそれが合図かのようにファニィが動いた。ファニィはベルグに背を向け、父親の胸に、顔を埋めたのだ。「い、嫌ではありません……お父さん」

勝ち誇ったような笑いを浮かべ、ネルドは娘の髪を撫でた。そして、ベルグに、

「何を見ている。早く銭を稼ぎに行かんか！」冷たく言ったのだった。

4

ベルグが仕事を終えたのは、太陽が沈み、辺りが暗くなってきてからだった。

蒼い月灯りの下、ベルグは家へと向かっていた。ふと空を見上げれば、無限の暗黒に無数の星々が煌めいている。今日のように幾らかの金貨が稼げた日は、そうした夜空の眺めを楽しみながら歩くのだが、今のベルグにそんな余裕はなかった。半ば走るようにして家へと急ぐ。

胸に不安があった。あの男――認めたくはないのだが、彼は自分の父親である――が帰ってきた日には、必ず、何か良くないことが起きるからだ。今回も、そうに決まっている。

ベルグは、妹のことを思う。愛するファニィを家に残していることが心配でならなかった。

ファニィは独りではない。ネルドが一緒だ。それが心配だった。独りであるなら、まだ救いが

ある。あの男がファニィに何もしないという保証はないのだから。
現に、昼間もそうだった。ベルグの前で、ファニィに嫌がらせをしたではないか！
思い出すたびに、ベルグの肉の裡に、どす黒い炎が、ちろちろと燃える。
しかも、あいつは自分とファニィの関係まで知っていやがったのだ。何故？　ふたりだけの秘密であったはずなのに。自分は、そのことを誰にも漏らしていないという確信があった。すると、ファニィが奴に教えたのか？
判らない。ファニィが、そんなことをするとは思えないのだ。第一、何の得にもなりはしない。自分の弱味をわざわざ教える人間なんているのだろうか。
いや、もしかすると——。気になることがあった。それは、ファニィがネルドに弱味を握られているのではないか、ということだ。脅迫されているとも言えるかもしれない。
だが——。結論を出せるわけがなかった。
やがて、家が見えてきた。ベルグは一瞬足を止めた。止めてから、今度は全力で疾り始めた。家に灯りが灯されていないのである。胸騒ぎがした。ファニィは家にいないのか？
粗末な木の戸を開け、中に入った。暗い。窓から差し込む月光だけが頼りだった。誰もいないのか。いや、人の気配がする。誰かが、干し草の上に寝転がっていた。
「早い帰りだな」低い声がした。ネルドの声であった。
「ファニィは——ファニィは、どこに行った？」

ベルグが訊くと、ネルドは笑ったようだった。
「お前には関係のないことだ」
「教えろ！」ベルグは叫んだ。
「人間にはな、知らなくても——いや、知らない方がいいこともあるんだぜ」
「教えろ！」さらに大きな声で叫んだ。
「そんなに、あいつが心配か？　まあ、無理もねえことか、惚れちまっているんだからな」
「教えろ」ベルグの声に抑揚がなくなった。怒りが頂点に達したのだ。
「へっ、そんなに凄むなよ。黙っていてくれと頼まれていたが……いいだろう。あいつはな、自分の体を売りにいったんだよ」
聞いて、ベルグは、心の中で何かが弾けたような気がした。さらなる怒りが沸（わ）いてくる。
「お前が——お前が、やらせたのか」ベルグが一歩踏み出した。
「その前に、ひとつ訊いておく」
ネルドは半身を起こした。「俺がいない時、あいつが金を稼いだことはなかったのか？」
ベルグは眩暈（めまい）を感じた。心当たりがあったからだ。裏切られた気分だった。
その時だった。外から短い女の悲鳴と、それに続く何かが倒れる音が聞こえたのは。ベルグは、反射的に動いていた。外に出た。地面には、ファニィが倒れている。手には、ベルグが持たせた、護身用の短剣が血に染まったまま握られていた。

「ファニィ!」

抱き起こした。胸から、どくどくと鮮血が溢れている。少女の目が力なく開かれた。

「ごめんなさい、ベルグ……あ、あなたにだけは、知られたくなかった……。お金が、お金がもっとあれば良かったのに、ね……」そこまで言って、ファニィは息を引き取った。

気がつくと、横にネルドが立っていた。

「何だ、くたばっちまったのかよ。こんなことなら、もっと楽しんでおけば良かったぜ」

ベルグの怒りが爆発した。立ち上がった。睨みつけた。「お、お前は、それでも親か。この金の亡者め!」声が震えていた。

ベルグが腰の短剣に手をやろうとしたその瞬間、ネルドの眼に、ぎらりとした光が宿った。

「今度、抜いたら死ぬぞ。二度も見逃すほど、俺は甘くないからな」

怖い声だった。悪どいことをして追放になったとはいえ、自力で王国直属の戦士になった男だ。その剣の腕前は常人の及ぶところではない。その気になれば、剣を持った人間を、素手で殴り殺せるに違いない。ベルグの勝てる相手ではなかった。

しばらくの沈黙があった。それを破ったのはネルドの方だった。

「金の亡者、か——。そうかもしれん。だがな、お前にも、この血は流れているんだぞ」

「——」

「世の中は金さ。金のない奴は、こうして——」

ネルドは足でファニィの死体を蹴った。「死ぬだけなんだよ」
「違う！」
「違わねえさ。あと数年すりゃあ判ることだ。何たって、俺の息子なんだからな」
「ふざけるなっ！」叫んだベルグは、ネルドに背を向け、歩き始めた。
「お、おい、どこに行くんだよ」
「お前とは違うってことを見せてやる」
「何だと？」
「お前がなれなかった近衛兵になってやる。それまで、せいぜい長生きすんだな」
こうして、ベルグは近衛兵を目指すことになったのだった。
近衛兵となり、父であるネルドを見返してやるために。

5

ベルグが、悪の大魔道師・ワードナについて聞かされたのは、地下迷宮の地下十層の第三の守護者としての仕事を与えられたその日だった。迷宮管理職にあるというドワーフがいうには、百年ほど前にこの地を騒がせたワードナが復活し、再び、恐怖の時代がやってくるかもしれない恐れがあるため、奴の埋葬（まいそう）されているピラミッドを監視する者が必要であるとのこと。

戦士ではなく、魔術師としての訓練を受けさせられたのには面食(めんく)らったが、このワードナ復活の話の驚きは、それを軽く上回っていた。一体、如何なる力が死者復活という奇跡を呼び起こすのであろう。初めは信じられないことであったが、この都市にあるカント寺院で実際に蘇生の現場を見せられたため信じざるを得なくなってしまった。

その昔、狂王として知られたトレボー王は、この邪悪な魔道師を倒し、奪われていた魔除けを取り戻した者を、近衛兵に取り立てるとの触れを出したらしい。そこでベルグは、もしも、自分が復活したワードナを倒したとしたら、近衛兵になることができるか、と訊いてみた。

答えは、〝当然のことだ〟であった。

ベルグは満足し、第三の守護者として、ピラミッドの警護を引き受けることにした。

そういうことだったのである。

《中の道》から《外の道》への扉を眺めながら、ベルグは、いつものように近衛兵に取り立てられた自分のことを想像して時間を潰していた。

近衛兵になれたら、真っ先に村へと帰るつもりだった。愛するファニィの死んでしまった今、村に未練こそないが行かなければならないと思っていた。そこへと帰って、父親のネルドに、自分が父親とは違うことを見せつけてやるのである。それだけが、生きがいだった。

早く近衛兵になりたかった。だから、不謹慎(ふきんしん)なことではあるが、彼が悪の大魔道師・ワード

ナの復活を望んでしまうのは無理もなかった。
そして、今、それが現実のものになろうとしていた。ただし、結果だけは彼の思うようにはならなかったのだが……。
石の扉の向こうに生じた殺気で、ベルグは空想から現実へと引き戻された。杖を持つ手に力がこもる。この殺気は、そろそろ戻ってくるはずの新入りたちのパーティが放っているのではない。もちろん、この扉の向こうに配備されている守護者たちのものでもない。直感的に、そう思った。では、誰の——？
考えるまでもないことだ。ついに来たのだ。夢にまで見た瞬間が！
石の扉が重い音を立てて、開き始めた。ベルグは、胸の前で印を結び、呪文詠唱の準備を整える。耳の奥で、鼓動が熱く、早くなってゆく。扉は開き続ける。
最初に見えたのが、ひとりのひ弱そうな老人だったため、ベルグは気を抜きそうになったが、そうしなかったのは、その後ろに腐臭を撒き散らす異形の姿を見たからに他ならない。
焼き払ってやる！　嫌悪を中心に、精神を増幅させてゆく。脳裏に描いたのは、愛するファニィを死に追い込んだ、憎いネルドの顔。怒りが肉体の裡に、どす黒い火を生み、増幅された精神が、それを大きな炎に育てる。身体の中心に生じた熱が、胸から肩へ、肩から肘へ、肘から手首、そして指先へと流れていくはずだった。
ベルグの精神集中を妨害したのは、ワードナが放ってよこした小さな袋だった。

それは、ゆるやかな軌跡を描き、ベルグの足元に落ちた。じゃらっ、という音を立てて。

ワードナと、その配下は、それ以上の動きを見せなかった。

ベルグは、悪の大魔道師の貌(かお)——暗くてよく判らなかったが、どうやら笑っているようだった——と、足元の小袋とを交互に見た。この袋の中に何が入っているのか。

近衛兵になることを夢みる若者は、注意深くそれを拾った。紐(ひも)を解き、中の物を掌に出してみた。想像通りの物であった。ふと、ファニィの笑顔が脳裏を過ぎる。

ああ、それは掌ほどもある、大きな金貨であったのだ。これ一枚で、通常の十倍の価値がありそうだった。袋の中味は全部で九枚。と、いうことは、これで金貨九十枚分——。

涙が溢れそうだった。これだけあったなら、ファニィもあんなことをしなくて済んだだろう。

再び、ワードナの貌を見た。まだ、笑っている。これで買収しようとでも思っているのだろうか。もう一度、金貨を見た。その時だった。溢れる涙にためか、掌に乗る金貨が、ふたつに割れたように見えたのだ。

そして、そこから吹き出す炎!

目を灼かれた。何も見えない。殺意が近づいてくる。腐臭が鼻をつく。

ワードナの笑い声が聞こえたようだった。

第4章
復讐

1

四体目の死体は、第三の守護者・魔術師のベルグだった。
血溜りに浮かび、徐々に冷たくなってゆくその肉塊を見おろしながら、侍は、ぎりぎりと奥歯を噛んでいた。
自分は、このベルグに、何故か親しみを覚えてしまったいた。ピラミッドの内側に入る時に、ただ一度だけ顔を合わせただけにも関わらず、なれそうな、そんな予感があったのに。何でも気軽に話し合える友人に
ああ、彼もワードナに殺されてしまったのだ！
「何故、止めたっ！」
語気も荒く、侍が、背後の僧侶を振り返った。「あ、あんたが、俺を止めなければ――！」
「それでも、この男は死んでいた」
僧侶が重く言った。「間に合わなかったよ」
侍の身体に怒りが満ちた。眼に壮絶な光が溜り、沸き出す涙に、ゆらゆらと揺れた。
「間に合わなかっただとっ！　間に合わなかったから、俺を止めたのか？」
「落ち着け」
ふたりの間に割って入ったのは戦士だった。「ここで言い争いをしたところで、何にもならんだろうが」

「いや、言わせろ！　そいつは、怖気づいたんだよ、ワードナを見てっ！」

「黙れ」

戦士が侍を睨んだ。静かだが有無を言わせぬ口調だった。

怖い眼に射竦められ、侍は、ようやく黙った。

戦士は僧侶に向き直り、続けた。「それは俺も訊きたかったんだ。もちろん、あんたが怖気づいたなんて思っていない。聞かせてくれないか、本当の理由を――」

沈黙が流れた。それを破ったのは僧侶の、

「判った」という言葉だった。

「ワードナが怖くない、と言えば嘘になる」

そう言ったあとで、僧侶は唇の端をわずかに吊り上げた。「だがな、勝てる見込みが出てきたんだ。あの大魔道師に勝てる見込みがな」

「勝てる、俺たちが？」

「そう意外そうな顔をするな」

僧侶は、侍に微笑みかけた。「仇討ちといっても、それは相手を倒してこそ叶うものだ。そのためには、奴を知らなければならない」

「それで、この守護者を……」

「この者は助からなかった。それだけは確かなことだった、気の毒なことだがな」

そこで僧侶は重く息を吐き、続ける。「しかし、だからこそ見えたんだよ、ワードナの戦い方が──。お前たちも、憶えておるだろう。サージの村にいた大道魔術師のことを」
「あの、クリーピング・コインを使う……」
戦士が言った。
「そうだ」
僧侶が頷く。
クリーピング・コインとは、練金術の奥義を究めんと研究を続けていた、さる大魔道師が偶然にして創り上げてしまった魔法生物である。形状は、掌ほどの大きさの金貨と同じで、怒らせると表面に亀裂が走り、そこから炎を吐き出す。この生き物は、その外見から、主に財宝の番人として使われた。財宝の中に混ぜておき、それを狙う盗賊を撃退するわけだ。ただし、彼の虫の居所が悪かったため持ち主に炎を吐いてしまったことなどがあり、今では、これを飼う人間は、よほどの物好きしかいないそうだ。
このクリーピング・コインをどこで手に入れたのか、ワードナは殺戮(さつりく)のための道具として使っていたのである。
「この男の目は、クリーピング・コインの炎で灼かれているな」
僧侶は、すでに冷たくなってしまった第三の守護者の、焼け爛れた貌を指さした。「恐らく彼は、この魔法生物の存在を知らなかった。そして、目が見えなくなってしまったところを、

生ける屍に喰われた。そういうことだろう」
「俺たちが見ていたのは、彼が喰われていたところだったのか」
「ああ、そうだ。お前の位置からは見えなかったかもしれんがな」
僧侶は頷いた。「ワードナの配下は、他に僧侶が数人いただけだった」
「《召還》か……」侍が、ぽつりと呟いた。
「《召還》だと？」
「ああ、そうだ。失われて久しいが、魔術師の呪文体系の中には、魔界に通じる《門》を開く法があったと聞いている」侍は、興味深そうに自分の顔を見る僧侶に言った。
「人間は魔界にいないと聞いたが」戦士が訊く。
「だから《召還》なんだ。このピラミッドの中に、奴を復活させようする者など入り込む隙はないはずなのに、それがいるということは、魔界に送り込んでおいた僧侶を呼び戻したとしか考えられん」
「すると、あのクリーピング・コインも、人間を喰らうゾンビも、魔界から呼び戻したと？」
「そういうことになる。恐らく、ワードナは殺される前に、自分の配下を魔界に避難させておいたのだろう。だが――」
「どうした？」言葉を切り、考え込んだ侍に戦士は声をかけた。
「どうやら、同じことを考えているようだな」

言ったのは僧侶だった。「何故、クリーピング・コインなどという下等な魔法生物を呼び戻さなければばならなかったのか、と」
侍は、無言で頷いた。
「何のことだ？」戦士が訊く。
「復活したばかりのワードナは、まだ本来の力を取り戻していない」
僧侶はひと言ずつ力を込めて言った。「ここと魔界をつなぐ《門》は開き切っていない。だから、奴は、クリーピング・コインを呼び戻すしかなかったのだ！」
——静寂。三人は、無言で歩き始めた。闇に向かって。ピラミッドの出口に待ち受ける、最後の守護者のところに向かって——。
ふと、侍は足を止め、振り返った。視線は、冷たく横たわる第三の守護者に落ちていた。
「あんたの分の仇も討てそうだぜ」そう言ってから、ふたりの後を追った。

2

殺される第四の守護者は、魔法の心得のある剣士——侍だった。
「我は、畏多きピラミッドの守護者！　ワードナよ、汝に与えられし永久の責め苦へ戻るがよ

い！　この先に待つのは死のみなり！」

守護者は細身の、湾曲した剣――刀を振りかざし、黄泉の国より舞い戻ってきた悪の大魔道師に、あらん限りの声で叫んだ。ワードナがここまで辿り着けたのは、他の三人の守護者が倒されたということである。だが、彼の心には恐れも、不安すらもなかった。

恐るべき相手だ。

自分が殺される可能性も充分にあるだろう。

しかし、それが何だというのだ。

自分は、ワードナと死力を尽くして闘うだけである。そう、それだけなのだ。

《無の境地》に達することが、すべての侍の目指すところだ。この守護者は、若くしてここに到達していた。彼よりも腕の立つ人間は少なくない。それでもピラミッドの守護者になることができたのは、彼のそうした資質を、迷宮管理職にあるドワーフが見抜いていたからに他ならない。《真の強さ》とは、如何なる状況においても己れの力のすべてを発揮できるかどうか、なのである。その意味だけで考えるなら、この守護者は、王国直属の戦士の中でも抜きんでているであろう。彼は、恐怖を胸の裡で殺し、冷静に闘うことができる数少ない男なのだ。

ワードナを護るようにして、守護者の前に五人の僧侶が現れた。

彼らは、この都市を中心として広められているカドルト教の僧侶ではない。汚れた悪魔の暗黒面に魅せられ、邪な力を欲したことで闇の軍勢となった破戒僧なのである。

その後ろには、腐臭を撒き散らす四体の生ける屍が、ゆっくりとした動きで、こちらを窺っていた。

僧侶たちの眼は虚ろだった。焦点が定まっておらず、忙しなく中空を彷徨っている。口は、だらしなく開きかけ、真っ黒な舌の踊る様が見て取れる。

「倒すです、ます。私が、ワードナ様。ああ、灯りが……癒します、傷を、あなたの」

「おお……おおおお。怖い、私が。彼が。あなたが。我を護り、あなたを。祝福を！」

「暗い——見えない。闇が、ここにも、あそこにも。灯して、光を。ああ、まぶしい」

「助けて、殺さないで。私が、あなたを殺すから。護って、私だけを。魔法の楯よ！」

「死にたくないなら、殺してあげよう！　私は死にたくないから、削ってあげる、生命を」

五人の僧侶は口々に意味をなさない言葉を吐き続ける。狂っていた。閉じ込められていた魔界の瘴気により、脳細胞は変異し、思考が捻れてしまったのであろう。無駄と思われる呪文を唱えながら、のろのろとした動きで、守護者との距離を詰めてくる。

「暗黒の力に惑わされし哀れな者よ。正義の刃の前に滅するがよいっ！」

横薙の刃光が、五人の破戒僧を襲う。

肉を斬る音。

骨を砕く音。

守護者が、ふうと溜めていた息を吐くと、どす黒い血をしぶかせながら、次々と僧が倒れた。

見れば、どの死体も首から上が消失していた。一瞬の間を置いて、五つの頭が床に落ちた。

それを確認した瞬間、守護者はワードナとの距離を一気に詰めた。勝負に出たのだ。

その時だった。ワードナの背後に、新たな殺気が三つ生じたのは。これがピラミッドを巡回していたパーティのものだとは、さすがの守護者も気づかなかった。

一瞬の気の緩(ゆる)みが生死を分けた。

ワードナを取り巻く、生ける屍(しかばね)——ゾンビの突き出した一撃を躱(かわ)せなかったのだ。右腕をやられた。奴らが見せた、先の緩慢(かんまん)な動きは、こちらの油断を誘うものだったに違いない。

傷口が焼けるように熱かったのは、最初だけだった。続いて感じたのは恍惚(こうこつ)。甘く、切ない痺れが右腕を中心に広がってゆく。骨が溶けていくにも似た感覚であった。

「ワードナ——!」

痺れ、動かなくなってゆく我が身を鼓舞するためか、守護者は吠えた。ここまできて動けなくなってしまった自分が悔しかった。眼前のワードナが、涙で霞(かす)む。

襲いかかるゾンビたちに、守護者は床に引き倒され、視界からワードナが消えた。もう一度吠えようとしたが、声はでなかった。腹部に鈍痛を感じた。信じ難い痛みだった。はらわたが捻られているようである。視線を自分の腹にやった。ゾンビに内臓を喰われている。

守護者は、自分に欠けていると思っていた感情を引き出されたことに気づいた。

生きながらにして喰われていく。

《助けて》
恐怖だった。

3

「待て――っ！　行くな！」
侍が叫んだが、無駄だった。戦士と僧侶の足は止まりはしなかった。
ふたりは、ワードナめがけて突進する。
剣を手に。
メイスを手に。
胸には、殺意を秘めて。
ワードナの前に広がる、朧な闇の存在に気づかないまま……。

4

最初に戦士が死ぬ。

抜き放った剣を振りかざし、戦士は疾る。

――殺す。

そういう思いだけが心にあった。

ナイトウォーカーの仇を討つための闘いが、この短時間で大きく意味合いを変えていた。もちろん、仇を討つつもりがなくなったわけではない。

そうではないのだが、戦士にとって、これは自分の参加することの出来る、最初で最後の《闘い》であると感じ始めていたのだ。

彼は、単に剣を交えることが《闘い》だとは思っていない。山賊に襲われ、殺し合いになることが《闘い》ではないのである。

剣と魔法に支配されるこの世界では、とかく正義の存在価値が薄い。力がすべてであり、力こそが正義だとされるからだ。そう思っている彼は、だから《正義》という言葉が嫌いだった。

強かろうが、弱かろうが、正しいことは正しい。

自分の信念を貫き、生きたかった。

それが《闘い》だと思っていた。

勝つとか負けるとか、得するとか損するとか、そんなことは関係ない。己れの生命を犠牲にしてまでも《善》を貫く。これこそが、彼の想う《闘い》なのである。

勝つにしろ負けるにしろ自分は死ぬであろう。

死ぬことは怖くなかった。
《真の闘い》を恐れるほど、彼は愚かではない。
だから、突然、身体中が炎に包まれても足を止めたりしなかったのだ。
皮膚が焼かれる。
肉が焼かれる。
苦しかった。
関係ない。
目もすでに見えない。
関係ない。
ワードナの気配が、自分の間合いに入った。
——殺す！
だが、その瞬間、戦士は絶命していた。

5

次は僧侶が死ぬ。

ワードナを目前にして焼け死んだ戦士を見て、僧侶は、これが罠であることを悟ったのだった。この薄闇のように見える黒い霧は、生きているのだ！
ガスクラウド――。
名は判らないまでも、その存在を彼は知っていた。
死に切れざる者の抱く怨念は、邪な《気》を吸収し、黒く大きくなっていく、と言われている。ある程度の知能を持ったそれは、他人の〝死〟を好み、殺戮（さつりく）を行なう者に付き従ってはその手助けをするらしい。
メイスを握る僧侶の手に力がこもる。
どうするべきか？
このまま、死を覚悟でワードナに襲いかかるか。
それとも、一時退却するべきか。
迷いが、彼の死を決めた。
黒き大気が、動いた。微風が、うねりになり、最後には震えとなった。
僧侶は、誰かに耳元で囁かれたような気がした。はっ、と立ち止まった。自分を包む薄闇が、踊っていた。闇が震動し、音を創り出している。耳を塞いだ。無駄だった。
それは、幼い頃に聞かされた子守歌によく似ていた。母親の温もりが蘇ってくる。
首に圧迫感があった。

それがワードナの手だとは判らない。
肺が新鮮な空気を欲しがっている。
心臓が死を警告している。
だが、その苦しみさえ、彼には心地よかった。
死とは、これほどまでに素晴らしいものなのか。
遠くで、侍の悲鳴が聞こえたが、無視した。

転章

1

ピラミッドを護る最後の守護者は生きながらにして喰われた。そして、悪の大魔道師・ワードナを倒すなどという考えを持った愚かな三人も、また次々と生命を落としていくこととなったのだった。

息を潜めて、その光景を見つめるふたつの影があった。《中立》の女魔法使いと戦士である。惨劇の現場から遠く離れた闇の中から、震えながら、泣き出したいのを堪えながら——。

「だから……だから、言ったのよ。死んじゃったら、何にもならないのに——」

女魔法使いの声は次第に嗚咽へと変わってゆく。流れ出す涙は、もう止められなかった。

戦士は自分が何をすべきなのか、判らなかった。判らないから、泣きじゃくる彼女を優しく抱きしめ、耳元で囁くしかなかった。

「大丈夫——大丈夫だ。俺たちは生きている。ここから逃げて、遠くへ、遠くへ行こう。ワードナの手の届かないところまで逃げるんだ……そこで暮らそう」

女魔法使いは、それでも泣き続ける。

自分たちと別れた三人が、本当にワードナに立ち向かっていくとは思ってもみなかったのだ。あの時、止めるべきだった。そうすれば、こんなことにはならなかったはずなのに。彼らの死は、自分にも責任があるのだ……。だから、泣き続ける。泣くことしか、罪を償う術を知らな

いから。だから、泣く。泣き続ける。
自分を抱きしめる戦士の腕に力が込められたことで、女魔法使いは、はっと顔を上げた。
「奴らが……行く」
戦士の低い呟きで、彼女も、そちらに目をやった。
まず、仲間の三人を殺した薄闇が姿を消した。それをゾンビが、のろのろとした動きで追う。
そして、ワードナは——。

2

ワードナは、そこに立ち尽くしたままだった。
永い刻(とき)が流れた。
ワードナが動いた。
こちらを振り返ったのだ。

3

世界の破滅が始まった。

この作品はパソコン版ウイザードリィ・シナリオ＃4
「ワードナの逆襲」を元に手塚一郎氏が書き下ろ
したものです。

ファミコン必勝本 Vol.2 1月19日号特別付録①

ワードナの逆襲

THE RETURN OF WERDNA

編 集 人／ファミコン必勝本編集部
作　　　／手塚一郎
カバーイラスト／末弥 純
発 行 所／JICC出版局
〒102 東京都千代田区麹町5-5-5

ファミコン版では近く第3作目が登場しますが、原作のパソコン版ではすでに5作、その中のウィザードリィ4（フォー）は、ちょうど1と対称的な位置にあるシナリオです。プレイヤーは悪の大魔道師ワードナとなり、魔法の魔除けを再び我がものにせんとして地下10階のピラミッドを脱出し、地上へと向かいます。新たな魔法陣（ペンタグラム）を見つけるたびにワードナは本来の力を取り戻していき、同時に強力な魔物を召還することもできるようになります。魔物は自分たちの意志で行動するため、状況に合わせた召還がゲームを解くカギとなるでしょう。新しい迷宮と罠とがパズル的であり、遊ぶ人の頭を混乱させます。

本書は、このウィズ4を小説化したものです。ただし、その内容上、ワードナを主人公にすることは難しく、悩んだ末に怪奇小説風に仕上げてみました。感想等を、ぜひお聞かせください。

（手塚一郎）

この作品はパソコン版ウィザードリィ・シナリオ＃4
ザ・リターン・オブ・ワードナを元に書き下されたものです

ファミコン必勝本
Vol. 2　1月19日号特別付録①
1990年1月19日発行（毎月2回第1・第3回金曜日発行）第5巻第2号通巻87号